

婦人公論 女性の生き方研究所 vol.10

「終活」あなたはする派? しない派? 後篇

創刊以来、「女性の生き方研究」を
積み重ねてきた『婦人公論』。

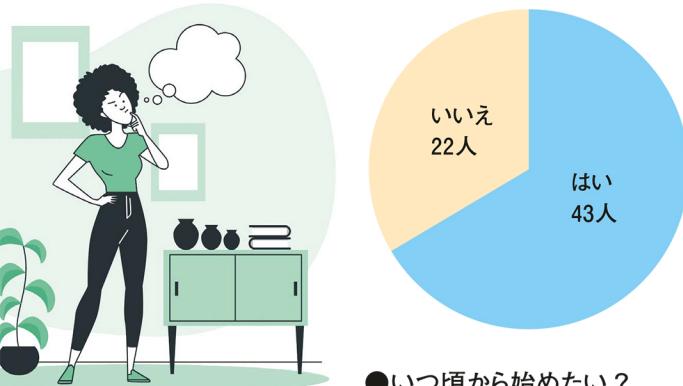
この連載では、読者のみなさんへのアンケートを通して、
今生きる女性たちの本音にせまります。

終末期をどうしたいかと考え、準備を進めていく「終活」。

後篇では、「終活」に関する悩みを聞きました

回答者数193人 平均年齢▼64・95歳
回答者の内訳▼60代:61人 70代:51人 50代:39人
80代:18人 40代以下:17人 90代:4人 不明:3人

(まだ終活をしていない人は)
思っていますか?



●いつ頃から始めたい?

「今すぐにでも!」(59歳・パート) / 「もうすぐ定年退職。それを機に始めます」(64歳・会社員) / 「後期高齢者になったら」(72歳・専業主婦) / 「やらなければいけないと常に思っています。明日からやります」(80歳・専業主婦)

Q 終活で気になることは? (複数回答可)

●老後資金の蓄え: 34人

「いつも思うことです、何歳で死ぬのかがわかれれば本当に楽なのに。お金をいくら使つていか悩むので」(60歳・専業主婦) / 「保険の見直しが課題です」

(50歳・専業主婦)

●持ち物の処分: 25人

「思い出の品など、どうしたらいいかわからない。皆さん、何から手をついているの?」

(54歳・会社員)

(67歳・不明)

「夫の所有物があまりにも多いため、万が一私が先に死んでしまった場合、娘に負担がいくことが心配だ。夫が亡くなったらすぐでも夫の物とともに自分のものも捨てるつもり」

(53歳・自営業)

「不用品処分にかかる費用が知りたい。一緒に作業してくれる人がおらず不安です」

(91歳・専業主婦)

●医療や介護の意思表明: 23人

「胃ろうや人工呼吸器は絶対嫌

「現在我一人暮らしでも何とかやつていているが、いつまで体力がもつか。同居? それとも

と言えそうだ。そして遺族は「本人の希望通りにしてあげられた」という充足感が湧いてくる」と。



1997年6月号の井上治代さんの記事。遺言は「最後まで自分らしく輝いて生きるためにある」とつづる

去しましたので、新年のご挨拶をご遠慮申し上げます。私もボチボチ考えておく必要ありと思い、自分が葬儀に関し遺言いたしました。

1. 香典は辞退
 2. 坊主、神主、牧師の世話をべからず
 3. 通夜不要
 4. 最後のお別れ
 5. できる限り簡素にやれ
- 以上でございますので、その節はご協力願い申し上げます。それでも、良いお年をお迎えください
- ますようお祈り申し上げます
- 実にあっぱれです。

「これがいい」と言い残してあげたほうが、ずっと『遺された者のため』であり、『思いやり』がある

年賀状欠礼の挨拶状に

「いくら『理想の最期』を思い描いても、死後の手続きを自分で行なうことはできません。家族または業者に託す必要が出てきます。前

出の井上さんも記事の中でこう述べていました。「好きなようにして」と遺族にゲタを預けるより、多くの人に受け入れられました。

「終活」ブームに火がつく前に、すでに素地があったのですね。
『遺言ノート』は今で言う「エンディングノート」のこと。90年代に入つてからの葬送ブームで、散骨やジミ葬など葬儀は多様化したものの、実現するのは難しい。そこで、井上さんは自分の死に方に某シティホテルの大広間に詰めかけた聴衆の熱意に講師もタジタジだったそうです。



『婦人公論』に見る
「理想の最期」

- とくに「高齢者施設? 未だに決心がつかない」(90歳・年金受給者) / 「認知症の介護が一番大変だと思う。施設か在宅かの選択は自分自身だけでは決めにくいので、アドバイスがほしいなあ」(不明) / 「日頃つきあいのない甥、姪に遺言・相続: 14人
- 「嫁ぎ先の墓に入りたくない」(53歳・自営業) / 「年金+aで生活できる老人ホームを探している」(58歳・パート)
- 「現在一人暮らしでも何とかやつていているが、いつまで体力がもつか。同居? それとも」(73歳・不明)
- 「一人娘に、いずれは家など資産を継承することになる。ただ、」(78歳・年金受給者)
- 「自分が先に死ねばいいが、夫の介護をしなければならなくなつた時、自分に体力があるのか?」(83歳・年金受給者)